

## シカゴ空港のにがいビール



食料・資源経済学研究室

中嶋康博 教授

Yasuhiro Nakashima

### Epiphanies

その瞬間

No.4

**私**の両親は和歌山県の出身で、子供の頃、お正月近くなると祖父母からおいしいものがたくさん届きました。宅急便などない時代ですから、駅留めの荷物で送られてきて、父はわざわざ新橋駅まで木箱入りの蜜柑や伊勢エビを取りに行っていたようです。一番の好物は、地元料理の鮎の昆布炊き。一度燻してから乾燥させた鮎に昆布を巻いて炊いたものですが、これなどは自分のソウルフードだと思っています。

小学校4年生までは埼玉県鳩ヶ谷に住んでいました。見沼田んぼという大きな水田地帯の南の縁にあたる場所です。友達と筏を作って沼を探検したり、カエルを捕まえてザリガニを釣ったりしました。その後県央に引っ越しましたが、あいかわらずまわりは水田や畑。冬の朝は凍った稲の切り株一つ一つを踏んで学校に通ったものです。こういう体験が、地域の農に対する私の想いを育んだようです。

大学では農業経済学を学び、助手となり、32歳のとき同じ研究室の生源寺眞一先生と一緒にアメ

リカを横断しました。3週間かけてワシントンD.C.からサンフランシスコまで大学や研究機関、そして農場をまわったのです。目的は米国の農業法の現地調査で、このときの研究は「90年農業法と米国の畜産」という報告書にまとめられました。この調査旅行は私にとって大変貴重な経験でした。食や農の実態と制度を体系的にとらえることを学び、これが私の農政改革の研究の出発点になっています。

じつはこの時、ちょっとにがい思い出があります。成田からワシントンD.C.に飛ぶ途中シカゴのオヘア国際空港で乗り換えがあり、そこでビールを飲もうとしたのですが、先生には売ってくれても私には売ってくれない。アメリカ人の目に私は未成年に見えたのでしょう。押し問答をしてもダメで、パスポートを見せてようやく買えました。それならばと、先生の真似をして口髭を生やそうとしたのですが、それが薄くてかえって高校生にしか見えず、逆効果。その後もしばらくの間は、海外でのどの渇きをいやすにはパスポートを常に持ち歩かなければならなかったのです。



生源寺眞一先生(左)とともに



91年9月、アメリカ横断中の中嶋先生